

近代日本コスメトロジーの普及と展開をめぐる一考察 ～美容家・藤波芙蓉の分析を通じて

奈良女子大学生生活環境学部

鈴木 則子

Fuyo Fujinami (1872-1952) was a male cosmetician who was an active newspaper and magazine writer and contributed to filmmaking from the late Meiji (1868-1912) to early Showa (1926-1989) eras, which corresponded to the period of great growth in the Japanese cosmetics industry.

Fujinami was not a doctor, pharmacist or beautician, and moreover he was a man. Despite this, he came to be called the “authority on beauty.” What was it in Fujinami’s values, aesthetic sense, knowledge of chemistry, and make-up techniques with regard to cosmetics that attracted so many women of the time? Clarification of these issues will lead to verification of the process of formation and development of modern Japanese cosmetology.

In this study, his books and magazines and newspaper articles on Fujinami’s background from birth until his achievements in the final years of the Meiji era, when he started his activities as a cosmetician, were collected and his descendants were interviewed. From examination of these materials, it was confirmed that the foundation for his later activities as a cosmetician was formed by the various social issues he encountered during the time he studied under a female Christian missionary in his youth in Sendai and his period as a journalist for the *Miyako Shimbun* newspaper after coming to Tokyo, as well as the network of personal connections he formed among politicians, businessmen, and scholars.

1. 緒言

藤波芙蓉（明治5～昭和27年（1872～1952））は、明治末から昭和初期にかけて活躍した男性美容家である。彼は明治43年1月刊の『新式化粧法』（『家庭百科全書』第25編、博文館発行）をかわぎりに、計4冊の美容書を刊行するとともに¹⁾、明治44年からは『女子文壇』²⁾・『婦人画報』³⁾・『読売新聞』⁴⁾などに、美容相談記事を連載していく。

また、婦人雑誌とタイアップして雑誌を窓口に、自分が開発した化粧品の通信販売をおこなったり⁵⁾、映画の化粧を担当したり⁶⁾と活動の幅を広げ、大正期には「美粧の権威者」⁷⁾と呼ばれるようになっていく。

藤波芙蓉が美容家としてメディアに登場しはじめた明治40年代は、日本が日露戦争後の経済成長を遂げ、自国の文化に強い自負心を持つようになった時期である。江戸時代の伝統的化粧法を封建的・非文明として否定し、欧米の化粧風俗を手本としつつも、西洋人とは人種を異にする日本人にふさわしい化粧法・化粧品料を模索した時代だった。

時代が求める新しい化粧情報は、新聞や明治時代後半に続々と創刊された婦人雑誌という近代的メディアを通じて、医者や美容師・理髪師など様々な肩書を持つライターによって発信されていく。中でも女性達に熱い支持を得たのが、

この頃から登場する、当時「化粧家」⁸⁾と呼ばれた種類の人びとで、芙蓉はその一人だったのである。

だが、ほぼ同時期に美容家として活躍した遠藤波津子（文久2～昭和8年（1862～1933））や北原十三男の事跡が、子孫らによる美容院やエステティックサロン事業の継承とともに現在も伝承されているのに対し、芙蓉の業績については、その履歴も含めて今ではほとんど伝わっていない。

芙蓉を取り上げた先行研究は、富澤洋子「女性雑誌に見る近代の美容研究家「藤波芙蓉」」⁹⁾が唯一のものである。富澤は雑誌『女子文壇』と『婦人画報』からうかがえる芙蓉の事跡を紹介し、彼を「江戸時代以来の伝統的な化粧から近代的な化粧へ、日本化粧史の転換点のキーパーソンであることは確かだろう」と評価するものの、史料的制約もあって、彼が美容研究家として立つまでの経歴については「今後の調査課題」としている。

医者でも薬学者でも美容師でもなく、しかも男性の芙蓉が、いかにして「美粧の権威者」となっていったのだろうか。当時多くの女性を魅了した、芙蓉の化粧をめぐる価値観・美意識・化学知識・化粧技術をはぐくんだものは何だったのか。これらの問題を明らかにすることは、日本近代コスメトロジーの形成と展開過程を検証することにつながる。

そこで本研究は、芙蓉の著書や雑誌・新聞連載記事を収集するとともに、藤波芙蓉の子孫への聞き取り調査を行い、その生い立ちから美容家として活躍を開始する明治40年代までの足跡について考察を加えた。

2. 第二高等学校時代

藤波芙蓉はその戸籍によると、明治5（1872）年5月28日、



Study of the spread and development of cosmetology in modern Japan through an analysis of cosmetician Fuyo Fujinami

Noriko Suzuki

Nara Women's University Department of Culture and Humanities

たばこ屋を営む鹿野太美治・ゑんの子として、仙台市に誕生した¹⁰⁾。本名は恒吉である。

芙蓉が西洋の化粧術に興味を持ったのは、「高等中学校」時代のことであった、と自身で記している¹¹⁾。明治20年4月、芙蓉が15歳になる春に仙台に第二高等中学校（「本科」は尋常中学校卒業生を入学対象とした）が設置されており、芙蓉はここで学んだと推測される¹²⁾。第二高等中学校のカリキュラムは、第一語学の他に第二語学もあり、また文系・理系に渡って広く授業科目が設置された。高等中学校の深く広い教養教育は、のちの芙蓉の新聞記者、作家、美容研究家という多彩な活躍の基礎となる教養を形成したと考えられる。

芙蓉は高等中学校時代、米国人女性宣教師「ブラウン嬢」のもとに寄宿して英語とともにキリスト教についても学んだ。ある朝、芙蓉は化粧する前の彼女の素顔を偶然見かけ、化粧した美しい顔との落差に驚嘆する。当時の日本の化粧は肌を真っ白に塗り、真っ赤な紅をさすのが一般的であったのに、西洋式の化粧は「素顔に見えて素顔より数倍美しい」。彼は、これこそが「化粧美の極致」であると悟ったという。

「ブラウン嬢」とは、ハリエット・M・ブラウンのことである。アメリカ西部婦人バプテスト外国伝道教会宣教師として、日本へ明治19年12月に派遣され、仙台に着任する。新伝馬町東3番丁に居を構え、積極的な布教活動を展開したが、特に聖書を普及させる活動を担う婦人伝道者「バイブル・ウーマン」の養成に力を入れた。同時に、この家を毎日曜夕方には青年達のために開放、毎週25～45名の大部分がノンクリスチャンの青年達が集まって、賛美歌・祈り・聖書を学んだ。やがて明治23年10月、彼女は山口県長府での布教活動に従事するため、仙台を去る¹³⁾。

彼女は化粧室で、1日2回化粧をしていたと芙蓉は記している。彼女の写真を現時点では見つけられていないが、彼女の前後に仙台に着任した女性宣教師達の写真のなかには、美しく着飾った姿も見られる。若き米国人女性宣教師の麗姿が、思春期の芙蓉の美意識に大きな影響を与えたのは間違いない。

芙蓉は著書『新式化粧法』のなかで、化粧室のしつらえについても細かに指示しているが、それはブラウンの化粧室の影響でもあった。

また、ブラウンから学んだキリスト教知識の片鱗は、『新式化粧法』の序文にある「斯道（化粧道、筆者注）におけるパフテスマのヨハネたるを得て、幾何なりとも該術研究者の参考となり、他をして新たに指を此研究に染むる動機ともなることが出来れば」という文章からもうかがえる。

やがて明治32年頃、芙蓉は藤波たけ（弘化2（1845）年～？）の養女志摩（明治14～昭和12年（1881～1937））の婿として、藤波家に養子に入る。結婚当時、たけ・志摩・

芙蓉の三人で写真館にて撮った写真が、『女子文壇』に掲載されている¹⁴⁾。ネクタイを締め、体にぴったりあった上着を着用した洋服姿の芙蓉は、いかにもハイカラな青年である。

明治33年7月から大正9年にかけて、志摩との間に五男五女をもうけた。御子孫の話では、愛妻家であり、また子供達をかわいがる良き家庭人であったという。後に子供達をミッションスクールに進学させており、洗礼こそ受けていないが、芙蓉とキリスト教との縁は続いたようである。

3. 『都新聞』時代

3.1 『東京市養育院月報』と『都新聞』

やがて芙蓉は仙台を出て、上京する。その時期は不明だが、明治38年9月の『東京市養育院月報』に「ナイチンゲール嬢の話」という翻訳を「藤波芙蓉」の名で執筆しているので¹⁵⁾、遅くともこの時には東京に在住し、「芙蓉」というペンネームで執筆活動を開始していたことは確認してよい。

東京市養育院は、明治5年に路上生活者を収容するため設立された施設で、やがて生活困窮者や病人だけでなく、棄児・孤児なども収容するようになる。渋沢栄一が、明治14年から昭和6年（1931）に死去するまで院長を務めた。『東京市養育院月報』はその機関誌として、明治34年の日清戦争後、「如今我邦の急務は軍備の拡張・財政の整理のみに非ずして、其最なるものは即ち慈善事業の振興にありとす」という「発刊の辞」とともに刊行された。芙蓉は本誌に海外ジャーナルの翻訳や小説を発表するほか、貧困や孤児問題について、論説文を寄稿している¹⁶⁾。

後年、芙蓉は『女子文壇』に渋沢栄一の車に乗せてもらったことがあると記しているが¹⁷⁾、芙蓉の美容活動は政財界、宮家・華族の夫人達とも深く結びついて展開する。こういった人脈形成の背景には、東京市養育院を通じた慈善活動も関係しているのだろう。

また、『東京市養育院月報』には『都新聞』主筆・田川大吉郎も寄稿している¹⁸⁾。就職時期は明確でないが、芙蓉は明治41年まで『都新聞』記者として働いており、ここにも東京市養育院の人脈の影響がみえてくる。

『都新聞』はその前身を、明治17年に夕刊紙として東京の毎夕社から発行された『今日新聞』とする。小西義敬・仮名垣魯文・野崎左文らを中心に、芝居だよりや花柳界の記事と読み物を売り物にしていた。20年に朝刊紙となり、22年には紙名・社名ともに『都新聞』へ変更する。25年から編集はすべて田川大吉郎が任され、芸能・流行・文学に特色をもつ新聞として定着する。

田川大吉郎はいったん明治27年に退社後、38年に再入社して再び主筆となる。彼は社会問題に多く発言し、民本主義の潮流の一翼を担っていた。都市問題にも関心が深く、

明治41年5月には参議院議員に初当選し、同年9月に東京市助役となっている（就任期間：明治41年9月～大正3年10月）。のちにキリスト教徒として、明治学院総理も務めた。

芙蓉は田川が助役就任のために『都新聞』を退社した際、一緒に退社したと『女子文壇』に自ら書いているので¹⁹⁾、明治41年8月ごろの退社と考えられる。おそらく芙蓉の入社そのものにも、田川が何らかの形で関わっていたのだろう。田川は38年の再入社後、中里介山・恒藤恭をはじめとする、後に政治・文学・アカデミズムなど様々な領域で活躍することになる若い記者たちを、一存で採用している²⁰⁾。

3.2 美容記事の展開

芙蓉は、『都新聞』では「相談の相談」欄の担当記者として、美容関係の質問に答えていたと『女子文壇』および『新式化粧法』に書いている²¹⁾。本欄は明治39年に主筆田川大吉郎が開設し、従来は田川が回答も担当したとみられていたが²²⁾、少なくとも美容に関する質問については、芙蓉が任されていた可能性が高い。

『都新聞』は女性や花柳界にも多く読者を持ち、風俗関係の記事も常時掲載された。芙蓉が在籍していたと思われる時期と重なる明治39年11月6日からは、「衛生叢話」欄に「化粧のはなし」というタイトルのシリーズが掲載される。化粧を衛生問題として位置づけ、有害化粧品に関する情報を積極的に発信しているが、担当は芙蓉ではなく山口竹庵記者である。山口は「化粧のはなし」を書く前には家庭医学について連載記事を書いており、新たに化粧品をとりあげるにあたって、化粧品に詳しい読者に情報提供を求めている。連載開始時点では、山口は特別化粧品に造詣が深いというわけではなかったようだ。

山口は、日本の旧来の化粧品や化粧法をそのまま踏襲することを否定すると同時に、盲目的な西洋化粧追随傾向をも批判している。日本と欧州とでは人種・皮膚の色が異なるので、舶来化粧品が年々増加するが、日本人は日本人の体質と肌の色にあった化粧品を用いるべきであるという。連載の中では、白粉・白色薬・石鹼・香水・香油・化粧水などをとりあげて、市販品の品質や自分で作る時の調合法を説明している。

なかでも注目すべきは39年11月20日から連載した、白粉の鉛毒に関する記事である。山口によれば、東京市中だけでも200種以上の白粉が出回っていて、そのうち150種余を試験した結果、輸入品も「東洋向け」は鉛・水銀を含有し、国産の粉白粉については、御園白粉以外はたいいてい鉛を原料としているという。パッケージに「無鉛」「衛生無害」とあっても、「無鉛」の意味ではないというのである。

また、当時の白粉市場は舶来品の偽造品が氾濫し、京阪では御園白粉の7割が偽造品で、それら偽造品には大量の鉛分が含まれているという。

12月3日付記事によると、鉛白粉に関するレポートは女性読者・化粧品業者の注目を集め、11月末ごろから東京では有鉛白粉使用者が減少するとともに、業者による化粧品改良が進み、無鉛白粉7、8種が登場したとある。

悪質な商品は白粉にとどまらなかった。当時普及し始めていた石鹼も、増量のために澱粉や土を混ぜることがあり、やはり舶来品の粗悪な模造品が出回っていた。石鹼の模造品は、化粧品以上に多いという。

白粉や石鹼が日本製より輸入品のほうが高く評価されたのに対し、髪油については日本製の椿油が推奨されている。西洋人と日本人の肌・髪は異なるが、特に髪油は鉱物性のものを使うと髪が赤くなるので、艶やかな黒髪を愛でる日本人には椿油が最良であること、ただし椿油と書いてあっても、たいいてい他の原料が混ざっているので注意するよう呼び掛けている。

この連載は好評だったため記事を改訂増補したものが、明治40年12月に山口竹庵著『男女と化粧』として単行本化された。『都新聞』に掲載された広告によると、本書は「化粧品其他二百余种の善悪並に選定し、其使用法をも懇切に記述」した「男女化粧法の案内」である²³⁾。山口竹庵による衛生を重視した化粧情報記事のスタンスは、後の藤波芙蓉の最初の化粧書『新式化粧法』と同一である²⁴⁾。時代は「衛生」をキーワードとする美容情報を求めていたのである。

4. 『都新聞』退社後

既述のように、芙蓉は田川の退社と同時期に『都新聞』を去ったとすると、芙蓉の退社時期は明治41年8月頃となる。芙蓉は藤波芙蓉の名前で『都新聞』に明治41年10月8日から同年12月31日まで、81回にわたって新聞小説「舜天丸」を連載しているが、社員として執筆したのか、退社後に執筆したのかは未詳である。

藤波芙蓉が美容の世界に姿を現すのは、現在確認できている範囲では明治43年1月、前掲『新式化粧法』が最初であるが、本書刊行前から美容家としての活動実績を持っていたようだ。「序」には、本書が「或る倶楽部の招請により、同志十二人の御婦人方に講演した其研究者の一人たる鈴木絹子嬢が筆記に訂正を加へて成った」とあり、上流夫人の小規模なサロンに化粧の講師として招かれていることがわかる。元原稿がこのサロンでの講義録だとすると、総頁数280頁近い本書のボリュームからして、相当の回数にわたって定期的に勉強会を重ねていたと考えてよいだろう。

また、第一章「序説」ではかつて「ブラウン嬢」の化粧術に感銘を受けたことをきっかけに、「以来芙蓉は非常な興味を以て此美術の研究実験に学余の時間を費せること幾多年、始めは芙蓉の妹等の顔を実験板に、漸や会得する所あるに及んで二三の某婦人、一人は人並より黒く、一人は頬骨の高い、一人はお高額な婦人を特に選出して研究を積

み、爾来五六の令嬢貴婦人に口述伝授し、昨今現に教へて居る人、習ひに来る人、七人ある」とのべる。高等学校以来化粧の研究を続けた結果、序説が執筆された明治42年当時、7人の女性に化粧を教えていたというのである。

5. 総 括

芙蓉は最初の著書『新式化粧法』の冒頭で、自身の化粧観を披瀝している。広い意味での化粧は人びとの生活に不可欠であり、また生活を豊かにする「芸術^{アート}」であるのに、なぜ女性だけのものとみなされたり、良家の妻女が化粧に熱心であつたら識者から批判されるのか。芙蓉は、それは現今の日本の化粧が不自然で、かつ芸娼妓を手本とするものだからであると述べ、これを「旧式化粧術」と呼ぶ。そして個々人の「自然美」を、人工的に手を加えて遺憾なく発揚させる化粧を「新式化粧法」と名づけた。「新式化粧法」の研究には、芸術としての化粧を解する高い美意識とともに、「本草学や薬物学や、それに化学は勿論、光線学・色彩美学等種々なる科学的知識を要するもの」と述べる。

芙蓉が考えるところの化粧研究とは、誰もが手軽にできるはずのものではなかったのである。それは芙蓉のように、教養主義の第二高等学校レベルの教育を受け、豊かな語学力をもち、キリスト教文化（欧米文化）を理解し、『都新聞』記者として活躍しうくらいに社会問題や文化の動向に対して鋭敏であることが必要だった。少なくとも彼はそのような確信している。

芙蓉は美容師や理容師、医師といった、いわば技術者としての美容家たちと自らとを明確に区別し、しばしば彼らの経済活動や化粧に対する見識について、雑誌や著書のなかで名指しで手厳しい批判も行っている²⁵⁾。そういった行為もまた、この信念に基づく。

芙蓉は『新式化粧法』のなかで「化粧道」という言葉を使用し、以後もこの言葉にこだわった。彼にとって化粧とは、近代日本にふさわしい新しい文化的・人間的豊かさの身体表現様式を作り出すことであり、茶道や華道などと同様に、技術と知性・精神性を兼ね備えた「道」を究めることであった。その意味で藤波芙蓉とは、日本が国家として近代化を成し遂げることに全力を傾けた明治という時代に、化粧という側面から日本の近代化に取り組んだ、“啓蒙的美容家”だったのである。

(参考文献)

- 1) 『あわせ鏡』（実業之日本社、明治44年）、『新美装法』（『家庭文庫』所収、婦人文庫刊行会、大正5年）、『美粧』（東京社、大正5年）。
- 2) 『女子文壇』は明治38年1月から大正2年8月まで発行された女性文芸投稿雑誌。芙蓉は「化粧問答」を明治44年3月から大正2年8月迄連載している。『女子文壇』

が大正2年8月に廃刊後は継続誌『処女』に連載を開始するが、終了年月は未詳。

- 3) 『婦人画報』は明治38年、国木田独歩らによって創刊された婦人雑誌。芙蓉は「化粧問答」を大正2年5月から昭和8年にかけて連載。
- 4) 『読売新聞』に「美容問答」を大正5年から14年間連載、『日本』に「化粧の話」を連載。
- 5) 『女子文壇』では明治44年11月から、『婦人画報』では大正2年11月から、化粧品誌上通信販売を開始している。また短期間だったらしいが、男子向け文芸誌『秀才文壇』誌上でも明治44年からニキビの薬を販売した。
- 6) 映画会社M・パテ商会の仕事をしていた。M・パテ商会は明治39年7月4日創立、大正元年9月に合併して日活となる。
- 7) 『読売新聞』大正13年6月29日付。
- 8) 『女子文壇』大正2年4月号。
- 9) 『マキエ』No.27、ポーラ文化研究所、2007年6月。
- 10) 『女子文壇』では明治9年生まれと芙蓉自身が記しているが、戸籍には明治5年とある。
- 11) 『新式化粧法』10頁、および『女子文壇』8巻5号（明治45年5月）。
- 12) 宮城県教育委員会編『宮城県教育百年史』第1巻明治編、ぎょうせい、1976年。
- 13) 穴戸朗大『バプテスト波の初期伝道師 東北伝道とバイブル・ウーマンの活動』耕風社、1995年。
- 14) 『女子文壇』8巻3号、明治35年3月。
- 15) 『東京市養育院月報』第55号、明治38年9月25日。
- 16) 例えば94号（明治41年12月）「論説 平和と幸福」など。
- 17) 『女子文壇』大正2年4月号。
- 18) 「三面記事を読みて」（其一、其二）第90号（明治41年8月25日）および第92号（明治41年10月25日）。
- 19) 『女子文壇』7巻11号、明治44年9月。
- 20) 土方正巳『都新聞史』日本図書センター、1991年。
- 21) 『女子文壇』7巻11号（明治44年9月）および前掲『新式化粧法』247頁。
- 22) 前掲『都新聞史』。
- 23) 『都新聞』明治40年12月31日付。
- 24) 『新式化粧法』の特徴については『研究業績中間報告集』第21号掲載の拙稿参照のこと。
- 25) 例えば「皆様方は北原先生も私も同じ化粧家として御認でしょうが、其内容少くとも北原先生は商売人、化粧品や脱毛術を売物にして生活して居る人、私は一種の道楽に研究して居る」（『女子文壇』大正2年1月号）と述べている。

(謝辞)

本研究を進めるにあたり、藤波亜由子氏、羽鳥彰子氏の協力いただいた。記して謝意を表する。